# われらは最後の育成士！

## 談話；第 39 期育成士のみなさん／指導員研修会より

Ｂ＆Ｇ財団の海洋性レクリエーション指導者資格“センター育成士”が、アドバンストインストラクターに名称を変えてから、その資格習得のための研修期間は 1 ヵ月となりました。センター育成士と呼ばれていた頃の研修期間は３ヵ月で、最後の研修になった第 39 期育成士の場合は２ヵ月でした。この第 39 期育成士のみなさんは、アドバンストインストラクターに名称が変わる直前に、最後の育成士となったこともあって現在でも深い交流が続いているそうです。

３９期生のみなさんと、当時、彼らを指導した B&G 財団のインストラクター

去る１月 29 日、30 日に東京で行われた指導員研修会でも、同期のみなさんが集まって話を弾ませていました。そんな輪のなかにアンドリーも割り込ませてもらい、いろいろなエピソードやご意見をお聞きしました。

## 辛い体験も振り返れば楽しかった思い出

■　みなさん、同じ最後の育成士として仲が良さそうですが、同期会などをされているのですか。

**A：**特に定期的にやっているということはなく、お互いに連絡しあって集まりたくなったら開きます。何年か前に名古屋でしたときは、同期の２／３ぐらいが集まりましたね。ちょうど日本の真ん中だから集まりやすかったのでしょうね。鹿児島からも来てくれました。

■自費で集まるのですか？

**全員：**もちろんですよ。仕事を離れて個人的にみても、それだけの価値がありますからね。同じ釜の飯を食べた仲間ですから、集まって顔を見るだけで有意義なものです。

■　みなさんの研修だけ２ヵ月だったわけですが、３ヵ月の研修で行っていた伊江島へのヨット遠征は研修メニューに入っていましたか？

**全員口々に**：ああ！　行きました、行きました。「お前は確か５３０だったよな」、「俺なんてシーホッパーに２人で乗ってたんだよ」等々（騒然となる）。

**A**：みんな威勢良く出航したんですが、途中で隣のヨットのマストが見えなくなるほど波が高くなってきたので、引き返すことになってしまいました。でも、後から船で島に渡って岩山には登りましたよ。延々と続く、すごく急な坂で、心臓が破けるかと思いましたけどね（笑）。辛かったなあ！

**B**：辛かったこと言えば、研修初日に炎天下で起立訓練をさせられたことを思い出しますね。なんで、こんなところに来てしまったんだろうって思いましたよ（笑）。でも、最初のうちは辛く感じた研修も、日がたつにつれて慣れてきて、２週間を過ぎる頃から研修生同士がみんな顔見知りになり、学生時代に戻ったようで実に楽しくなりました。

そして、残り１週間ぐらいになると、なんだもう１週間しかないのかなんて、ちょっと物足りない感じがしてきたから不思議です。

**C**：そうそう、確かに研修はきつかったけど、振り返れば楽しい思い出になっているんだよね。最終日なんて、もう終わっちゃうの！　なんて感じだった。

**A**：いまの人たちはどうなんでしょうか？　１ヵ月の研修では短いような気がしますね。いまの世の中、なかなか２ヵ月も３ヵ月も職場を離れることができないと思いますけど、実際に体験した者から言わせてもらえば、それぐらい長くやったほうが成果が出るような気がします。

**B**：これから研修に参加する人には、１ヵ月という期間を長いものとは思わず、短い期間にどれだけの知識と技術を吸収できるかという認識で臨んでもらいたいですね。宿泊施設の面など生活インフラは私たちのときよりかなり恵まれているはずですから、研修に気持ちを集中して欲しいと思います。

## 楽しさと同時に自然の怖さを教えることも大切

■　育成士の研修メニューで一番、思い出に残るものは何ですか？

**A**：研修で一番おもしろかったのはヨットですね。私の町の子供たちにも、風という自然の力を使って自在に走ることができるヨットを教えたいんですが、残念なことに水面がないんですよ。ヨットは他力本願では覚えられない、やる気を起こさないと走ることができない点が大きな魅力ですし、どのぐらいの風までなら乗れるという自分の限界を知ることも

できます。自然に対して自分の力がどこまで通じるかということを理解できるかどうかは、とても大切なことだと思います。

一般的に、子供たちには海や川に近寄るなという教え方が浸透していますが、危ないから近寄るなではなく、何がどうして危ないのかを知っていれば近寄らないはずです。ヨットの研修を通じて自ら体験したことを参考にしながら、子供たちにはそんな教え方をしたいと思うようになりました。

**B**：私もヨットを子供たちに教えたいと思っていますが、イベントを打つにしてもヨットは艤装に時間がかかるし簡単には乗れないという点がネックになってしまいます。そのため、初心者でも手軽に乗れるカヌーが、どうしてもメインになりがちですね。

**D**：水面がない山あいの海洋センターなら、海にある海洋センターと交流すればいいんですよ。私のところでもしていますが、山の子を海に連れ出すと、すごく喜びますし、海の子も山でキャンプをすると喜びます。マリンスポーツにしろキャンプにしろ、私たち大人も子供といっしょに体験しながら何かを教えられるところがいいですよね。特に海は、子供たちに楽しさと同時に怖さも教えられます。そうした教育を、もっとすべきなんじゃないのかな。普段、海に接していない山の子を海に連れていくと、楽しさばかりが先立ってしまい、海の子たちに比べて警戒心が薄れがちになります。私たちとしては注意が必要ですが、そこで、こうしたら危ないよと教えてあげることで子供たちは初めて理解するわけです。放っておいたら、「近寄るな」と書かれた看板を無視して海や川で溺れてしまう子供をつくってしまうことになってしまいます。

**E**：私の町では、高校の体育の授業でマリンスポーツを教えるようになりました。４年経ったので、今年から、すでに体験済みの高校３年生が小学生を教えるという仕組みを試しに作ってみたところ、普段ツッパっていたり大人に口ごたえしたりするような生徒でも、ちゃんと小学生を指導するんですよね。そして、授業が終わると小学生たちが高校生たちに大きな声であいさつするようになり、子供同士の交流が活発になってきました。教えるのは大人だけだという考え方を、ちょっと変えただけで、とても良い効果が表れています。リスクを恐れずに、良いと思った手段や方法をいろいろ考え試してみるべきだと思います。

## この人的財産を大いに活用していきたい

■　研修では、マリンスポーツを学んだこと以外に何か得たものはありますか？

**C**：研修には、マリンスポーツを人に教えるための技術を身に付けるために参加するわけで

すが、全国からやってきた人たちと交流できる点にも大きな価値がありますよね。最初は、お互いに方言が分からなくて困惑もしますが、言葉がよく通じなくても、いっしょに研修をしていると自然にコミュニケーションが取れてしまう、そんな体験がすばらしいですよ。だから、同期生とはいまでも付き合いがあるんです。

A：自治体の行政に携わっている者としては、こうした他の地方の人脈はとても頼りになります。普段、身近な情報は手に入りますが、遠くの情報は入りにくいですからね。その点、私たちは「オレのところはこうだけど、お前のところはどうしている」と、北海道から沖縄まで全国に散らばる同期生に気軽に電話できるわけです。地方へ出張に行ったとき、その近くに同期生がいたら、かならず会って情報を交換しますしね。同期のネットワークは貴重な財産と言えます。

D：ネットワークという意味では、今回の指導員研修会では B&G コンパスの公開に関する質問や意見が出ましたが、私たちとしては B&G コンパスについては、とても関心があります。どんな事業がどこで行われているかといった情報が簡単に知ることができるようになれば、海洋センターを運営する者としては、こんなに役立つものはありません。

B：できれば、一覧で見られるものが欲しいですね。お互いにお互いを比較して、刺激し合えます。

E：各市町村によって、海洋センターを運営管理する組織に多少の違いがありますから、同じ内容のイベントでも、やり方に違いも出てきます。それを参考にするだけでも、たいへん役に立ちます。また、ある町では青少年の育成、ある村では高齢者の健康対策と、それぞれ力を入れている部分の違いもあると思います。こうした地域ごとの特性を調べることも、これからの我が町を考えるうえで貴重です。同期生同士、電話や会合などで盛んに情報交換はしていますが、B&G コンパスが充実していくことで、さらにその輪が強力なものになっていくと思います。

■　みなさん、今日はどうもありがとうございました。

（注）文中写真はイメージ（アドバンストインストラクター研修より転載）